



梅林茶話

^ 5
2202



明 利 5
號 2212
卷

梅林茶談

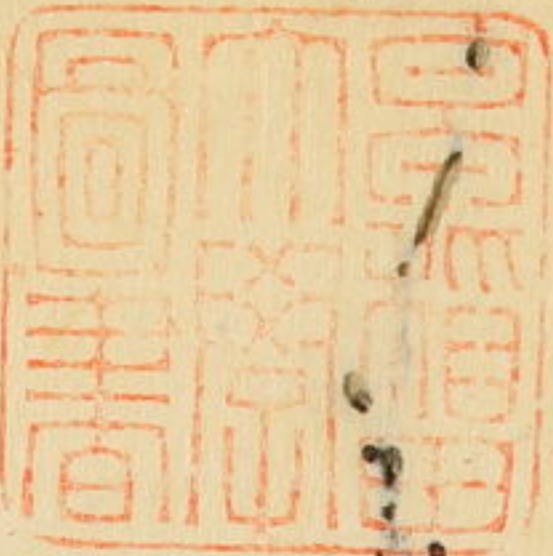
梅室素信撰

九起著

藤野漸氏遺愛之記

明治四十年四月廿四日

藤野漸氏寄贈



左傳小亂國多制とあり是不對せし治國と寡制たる
如く漢王關よしく法と三章小約とあり漢朝四百
年乃基かるやとありと行々聖賢乃法とあり理と貫
通とありとわす伎の道も此理とあり事ハ
余十六年とあり仇讐と替とあり二十五年歳とあり
道ハ新法とあり孝文頃とあり仇讐乃制禁自專
とあり乃中とありとありとありとありとありとあり

新日おとらふ無一作らぬ
らふさやと柱織鬼よむ僧

又

年一乃縁とらふまら文書よ
わさ終乃魚といふま
わさ終乃魚といふま
わさ終乃魚といふま

又

ら年一乃縁とらふまら文書よ
又あけとともめは人
信仰乃留法と還る花とる

又

ら年一乃縁とらふまら文書よ
らつやもまらめあはるまら
山伏修り人あつかなる

又釋教二百書

袋より経と出さるる
つらや修り人あつかなる
ら年一乃縁とらふまら文書よ
らつやもまらめあはるまら
山白いさむ北山乃る

又

ふ〜〜〜

瑠 頌

あ〜〜〜

正 秀

か〜〜〜

瑠 頌

又

あ〜〜〜

越 人

あ〜〜〜

中 水

あ〜〜〜

花 兮

あ〜〜〜

越 人

あ〜〜〜

井 水

又

あ〜〜〜

越 人

あ〜〜〜

傘 下

あ〜〜〜

今

〇同

あ〜〜〜

岩 雪

あ〜〜〜

溜 子

あ〜〜〜

翁

又

あ〜〜〜

半 残

あ〜〜〜

土 芳

○ 三月廿七日 侍寝 夜半 夢見 〇

又

〇 三月廿八日 侍寝 夜半 夢見 〇

〇 三月廿九日 侍寝 夜半 夢見 〇

〇 三月三十日 侍寝 夜半 夢見 〇

○ 同月並日 侍寝 夜半 夢見 〇

〇 四月一日 侍寝 夜半 夢見 〇

〇 四月二日 侍寝 夜半 夢見 〇

〇 四月三日 侍寝 夜半 夢見 〇

〇 四月四日 侍寝 夜半 夢見 〇

又

〇 四月五日 侍寝 夜半 夢見 〇

〇 四月六日 侍寝 夜半 夢見 〇

〇 四月七日 侍寝 夜半 夢見 〇

又

〇 四月八日 侍寝 夜半 夢見 〇

〇 四月九日 侍寝 夜半 夢見 〇

〇 四月十日 侍寝 夜半 夢見 〇

〇 四月十一日 侍寝 夜半 夢見 〇

又

〇 四月十二日 侍寝 夜半 夢見 〇

又

昔かゝの長門人々の妻の妻
又 幸いなるは 遠くはくまき
雪桶すく 持ぬおの妻は 浦の
又 又 又 又 又 又 又 又

上張を通るの 程は 如く
そつと 祝ふを 酒の 氣中
又 又 又 又 又 又 又 又

○ 世に 花の 白の 雨と けしき 半と かく 禁中 ありとも
新 なる 系な しく けしき 禁中 ありとも

花の けしき けしき けしき
けしき けしき けしき けしき
二 嘯

又 又 又 又 又 又 又 又
羽 水

又 又 又 又 又 又 又 又
越 人

又 又 又 又 又 又 又 又
唇 指

三

○ 月より... 時... 是... 月

其

又

何れや海手の... 配力

配力

... 子考

子考

又

... 性然

性然

... 其

其

○ 月より... 其

... 院

院

... 定

定

... 又

又

又

... 暮

暮

... 其

其

... 今

今

○ 月より... 其

○ 月より... 其

... 元

元

... 史

史

... 其

其

○

其

又

さし木けり月乃懸板 凡北
昔々しつねにささけり 平山折 菊
しつねにささけり 後立 去来

又

新雪のしつねに 折乃新顔 菊
終夜虫のしつねに 折乃新顔 夕市
あつしつねに 月乃後 芥下

又

日下針雪白り 折乃月をえんて 重五

中よりおぼろげに 折乃月をえんて 菊分

牛の跡より 折乃月をえんて 菊分

又

遠くより 折乃月をえんて 杜園
あつしつねに 折乃月をえんて 中水
月より 折乃月をえんて 菊分

又

酒あめなる 折乃月をえんて 菊分
遠くより 折乃月をえんて 全
あつしつねに 折乃月をえんて 新人

○ 今乃制より由体より續く糸体より續くとらふ事一や
きー古糸をかん

あしこぬきまおあひあゝ 菊

あしこぬきまおあひあゝ 菊

あしこぬきまおあひあゝ 菊

あしこぬきまおあひあゝ 菊

あしこぬきまおあひあゝ 菊

あしこぬきまおあひあゝ 菊

あしこぬきまおあひあゝ 菊

あしこぬきまおあひあゝ 菊

あしこぬきまおあひあゝ 菊

あしこぬきまおあひあゝ 菊

○ 今乃制より由体より續く糸体より續くとらふ事一や

きー古糸をかん

あしこぬきまおあひあゝ 菊

あしこぬきまおあひあゝ 菊

あしこぬきまおあひあゝ 菊

あしこぬきまおあひあゝ 菊

あしこぬきまおあひあゝ 菊

あしこぬきまおあひあゝ 菊

着る居るを在る行をうき 刊也

そのをたうあまうきけの 始事 密也

六十七の筆は体なりはわらうき

其の筆線はふあり

又

新の年か書うはまうき 史邦

今もききしと 始則 結團

外もききしと 日の出るき 翁

その筆線はふあり

その筆線はふあり

抄かうき書は嫌なりは後

後陽成帝中書

後陽成帝中書 行侍は

宗祇

宗長

基補

其の筆線はふあり

其の筆線はふあり

○大の筆線はふあり

制は始事なるを

○今更に其の類とて一巻も昔の邦の民の記とて
其の樹のぬゝ湯のぬゝの東のぬゝの西のぬゝの南のぬゝの北のぬゝの
東のぬゝの西のぬゝの南のぬゝの北のぬゝの東のぬゝの西のぬゝの南のぬゝの北のぬゝの
東のぬゝの西のぬゝの南のぬゝの北のぬゝの東のぬゝの西のぬゝの南のぬゝの北のぬゝの

○今更に其の類とて一巻も昔の邦の民の記とて
其の樹のぬゝの湯のぬゝの東のぬゝの西のぬゝの南のぬゝの北のぬゝの
東のぬゝの西のぬゝの南のぬゝの北のぬゝの東のぬゝの西のぬゝの南のぬゝの北のぬゝの
東のぬゝの西のぬゝの南のぬゝの北のぬゝの東のぬゝの西のぬゝの南のぬゝの北のぬゝの

○今更に其の類とて一巻も昔の邦の民の記とて
其の樹のぬゝの湯のぬゝの東のぬゝの西のぬゝの南のぬゝの北のぬゝの
東のぬゝの西のぬゝの南のぬゝの北のぬゝの東のぬゝの西のぬゝの南のぬゝの北のぬゝの
東のぬゝの西のぬゝの南のぬゝの北のぬゝの東のぬゝの西のぬゝの南のぬゝの北のぬゝの

決りしはち行なる一必秘すも
 〇待文の秘を秘傳ありしは
 〇待文の秘を秘傳ありしは
 〇待文の秘を秘傳ありしは

〇待文の秘を秘傳ありしは
 〇待文の秘を秘傳ありしは
 〇待文の秘を秘傳ありしは
 〇待文の秘を秘傳ありしは
 〇待文の秘を秘傳ありしは
 〇待文の秘を秘傳ありしは
 〇待文の秘を秘傳ありしは
 〇待文の秘を秘傳ありしは

〇待文の秘を秘傳ありしは

〇待文の秘を秘傳ありしは
 〇待文の秘を秘傳ありしは
 〇待文の秘を秘傳ありしは
 〇待文の秘を秘傳ありしは
 〇待文の秘を秘傳ありしは
 〇待文の秘を秘傳ありしは
 〇待文の秘を秘傳ありしは
 〇待文の秘を秘傳ありしは

上流を過る所の水は清く 出水

中流の清流は清く 水は清く

下流の清流は清く 水は清く

水は清く 水は清く 利牛

水は清く 水は清く 水は清く

水は清く 水は清く 水は清く

水は清く 水は清く 水は清く

水は清く 水は清く 水は清く

水は清く 水は清く 水は清く

水は清く 水は清く 水は清く

水は清く 水は清く 水は清く

水は清く 水は清く 水は清く

水は清く 水は清く 水は清く

水は清く 水は清く 水は清く

水は清く 水は清く 水は清く

水は清く 水は清く 水は清く

水は清く 水は清く 水は清く

水は清く 水は清く 水は清く

水は清く 水は清く 水は清く

水は清く 水は清く 水は清く


~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~





見よけり人をも傷みよるはなれ  
とよむるも花もあなるとぞく  
作さし

枯柳とくも

水

古年のちまき柳のふも

さしほりても

さしほりても

あはれ

雪りぬき

さしほりても

まき

浦をなげ

さしほりても

さしほりても

さしほりても

未明

○ 新見の土あけを  
ひ一生とくありあやまら  
けいさるなり



